



佛教社会福祉学の意図するもの

水 谷 幸 正

—

一 佛教徒として、また蝸牛歩にも劣る一佛教徒として、わたくしはかねてから、理論佛教学や歴史佛教学に對して実践佛教学はいかにあるべきか、ということについて強い関心を持っていた。佛教の思想や哲学や教理が闡明され、その現代的意義がいかに宣揚されても、また永い伝統を誇る佛教のその歴史性が各時代にわたって実証的に解明されているにしても、現実に一佛教徒としてその日常生活がいかにあるべきか、現代社会の生活の中に自己の佛教性をどのような形で具現してゆくべきかという、佛教の実践論を具体的に確立しない限り生きた佛教にはなり得ないからである。

佛教者であるかぎり、誰しもこのような実践論に関心を持ち、また身をもって実践していることであろうが、とくにわたくしは細々と学問を続けながらも、とくに実践佛教に関心を持たざるを得ない立場におかれていた。それは、一ヶ寺の住職としての僧侶であることを本職としていること、大学に籍をおきながらも学問研究に専心することができず大学行政に主力を注いできた、ということである。いわば、寺門の経営とか大学の経営という世俗的なことに身をおき心を費してきたので、念佛行にいそんだり象牙の塔にこもったりすることが許されなかったのである。

そこでいきおい、学問と生活や、思想と実践との乖離が注意せしめられるようになり、その接点をまさぐって彷徨

徨するようになった。このことは、悪くいえば合理的、実証的な真の学問からはずれた似非学問におちいることであり、良くいえば生活に根ざした主体的学問を求める方向にあったとも言えようか。まことに大ざっぱな言いかたであるが、明治以後の日本の学問の歴史をみても、戦前はドイツ観念論を主にした学問のための学問であり、戦後はアメリカのプラグマティズムを主にした実用のための学問である、といえよう。だからといって、なにもわたくしがプラグマティズムに依拠したというわけでは全くないが、学問のための学問のありかたに反省を加えなければならぬことを窃に考えていた。とくに佛教学においては学問と實際との背反が甚だしい。佛教学いよいよ盛んにして佛教ますます衰える、とか、僧学あつて佛教学なし、と評されていることは、必らずしも正当を得たものとは言えないにしても、佛教学をも含めて佛教全体の現代化や社会化という課題が足下緊要事であることを認めねばならない。これは多岐多面にわたるまことに複雑な問題を含んでいる。それらの一々をあげつらうことはできないが、たとえば佛教学のみに限って

一つの例をあげれば、佛教学の位置づけという問題を考えると、哲学や倫理学と同じように人文科学の分野で位置づけるだけでよいのか、それとも社会科学の分野からのアプローチを主にすべきなのか、ということも一つの大きな課題になるであろう。

このようなことを模索しているときに、十数年前にみるが、佛教福祉学科という日本唯一の学科づくりをおこない、さらに文学部に社会福祉学科を設置し、つづいて社会学部をつくつてその中に社会福祉学科を移行するとともに社会学科を設置するという仕事をするることになった。わたくしは社会学者でもなければ、まして社会福祉学者でもない。しかし、佛教精神を建学の精神とする佛教大学において設置する社会福祉学科の方向はいかにあるべきか、あるいは佛教福祉学科創設の理念や学問のすじみちなどを素人ながらに考えねばならない立場におかれたのである。実践佛教学のありかたについて将来への課題という形でさきに述べたように少しばかり反省していた時でもあつたので、そのこととの重なりにおいて、佛教社会福祉について佛教学の立場から多少考えるところ

があった。そのときの問題意識を列挙すればつぎの三つのことに集約されると思う。

(一)、佛教および佛教学の現代的展開について。教壇の仕事（文献学、思想史、歴史学）もなるほど大切であるが、それにどまらず、むしろそれを中止してでも実践問題の研究に立ち向かう広汎かつ多方面の問題領域が佛教学の前にあらわれてきているのではないか。

(二)、社会福祉学の学的根拠について。多岐にわたる社会福祉の研究に統一的な背景を与える強力な理論体系の確立が要求されねばならない。社会科学として、外面的現象的なものの法則を調査や統計によって経験的に打ちたてたり、社会科学のイデオロギーの中に埋没せしめたり、社会福祉の技術論を向上さすだけに終ってはならないのではないか。

(三)、人間関係学としての反省について。佛教学は「人間探究の学」といわれるように人間学であり、社会学は人間関係学であり社会福祉学というまでもなく人間福祉の学である。佛教学は人文科学系に含まれ、社会福祉学は社会科学系に含まれているようであるが、両者を統一

した文化科学、人間科学が樹立されねばならないのではないか。

右のような問題意識のもとに、「浄土教と社会福祉」というテーマをもって「浄土宗学研究」第二号に半ば評論的な拙論を発表した。まず(一)「現世利益と社会福祉」(二)「実践宗学と社会福祉」の両章でこの問題を取りあげた理由と動機を明きらかにし、(三)「宗教と社会福祉」で両者のつながりを究明し、(四)「キリスト教と社会福祉」でキリスト教社会福祉の実践原理を求めたあとで、(五)と(四)の両章をふんまえて佛教福祉論の構成およびその意図するところを(五)「佛教社会福祉学の意図するもの」として拙考をまとめ、佛教と社会福祉についての諸問題を解決するための基盤を考究したのである。

いま、本誌の編集者からその(五)についての本誌への再掲を求められたが、十年近く前の論考でもあり、まことに幼稚な愚考にすぎないのではじめは固く辞退した。しかし、あるいは一部でも参考になることがあるかもしれないと考え直し、編集者の熱意にほだされて、要求に応ずることにした。考え違いや考え不足も目立つので手を

入れるべきであるが、時間的余裕もないので、不満ながらそのまま項をあらためて載せることにする。

二

佛教社会福祉という用語は未だあまり一般化されていない。福祉という用語でさえも、それがかなり一般化しているとはいえず、その意味するところは甚だ漠然としてゐる。「福祉国家の建設」はひとしく政治家が目標として掲げる合言葉であり、最近とくに強調されているところでもあるし、また「世界人類の福祉に貢献する」ことが文化や学問をはじめとする人間生活のあらゆる分野における全世界人共通の最大目標であり、願いである。平和といい、自由といい、幸福といい、科学の進歩といい、理念の確立、精神の深まりといい、すべてはこの「福祉」という概念に包括されているといっても差支えないほど、現代社会はすべて福祉をめざしているのである。しかるに、ではその福祉とは何かと問われたならばやはり簡単には即答できない。個人あるいは社会の幸福な状態である、ということでは解答にはならない。より

具体的なありかたが明示されなくてはならない。資本主義社会のめざすところ、社会主義国家の目標、ユートピア国土建設の理念、宗教精神にもとづく神の国、天国、浄土の現実化などなど、それぞれの思想によって個人や社会のありかたが具体的に確立されているから、それらを統一して一つのまとまった具体的な定義を与えることは不可能であろう。これについては社会思想史の学問分野で考究されるべきことであるから、ここでは詳しくふれることは避けた。ただ、それが個人についてのみ云々されることがではなくして、社会や国家についてのありかたを、さらに云えば人間生活のありかたを具象的に表現したものであることを擲んでおくべきである。したがって、「福祉」といった場合は、当然に「社会福祉」という概念にそのまま置きかえられる。

では、社会福祉とは何か、ということについては、社会福祉学において明きらかにされているところであるから、いまはそれに譲ることにしよう。ただし、その社会福祉の概念が広い学問的分野からの永い伝統にもとづく所産ではなくして、慈善事業 *Carity* → 社会事業

という歴史的発展の系列において形づくられてきた一つの技術論の分野を主とするものであって、学問的領域においては未だ確固とした基礎づけがなされていない現状である、といつてもさしつかえないであろう。この提言にたいして、社会福祉学者からあるいはげしい反論のあることが予想される。社会福祉学はすでに充分な学問的基盤の上に立つ一つの科学であると。しかし、わたくしはあえて言う。統一的な学問的基盤を与え強力な理論体系を確立せんがためにこそ、佛教社会福祉論を展開しなくてはならないのであると。このことについてはあとでもう一度ふれることにするが、ともかく佛教社会福祉とは、たんに佛教と社会福祉との結合をはかるだけのものではなく、社会福祉のありかたが佛教的理念にもとづいて明きらかにされたところに打ちたてられるものである。したがって、それは佛教社会福祉学あるいは佛教福祉論という名のもとに学問的に組織化され理論的に体系化されるものである。

ところで、この佛教社会福祉学という学問も全く新ら

しい学問分野であつて、いわばこれからの学問である。

最近、佛教社会福祉学会が組織されたことによつて、この方面の研究が一段と進歩するであろうことが期待される。しかし、この学会も、佛教社会福祉とは何かということについてはやはり未だ暗中模索の状態にある、と言わざるを得ないし、問題のとりあげかた、アプローチのしかた、解決の方法論などもいまから設定すべき段階にある。このことについての著書としては、守屋茂氏の「佛教社会福祉学の本質」(同朋学報第十一号)があつて大いに参考となるが、体系的にまとめたものとしては、森永松信氏の「佛教社会福祉学」が唯一のものである(そのほか、福原亮巖、杉本一義共著「佛教福祉学」があるが、これにはわたくしがいま述べたような問題意識による学問的反省がなされていないので、とりあげる必要を認めない)。この著書は、はじめて佛教社会福祉学の方向と課題を明示したものであつて、未開拓の分野にユニークなメスを入れた点まことに功績大なるものがある。しかし、この著述に含まれていることだけがすべてではないし、また方法的にいつてもこれは一つの型を示めしているにすぎな

い。いろいろな角度から新しい体系化がなされてこそこの学問の発展が期待されるのである。ところで、この著述によるならば、佛教社会福祉学とは佛教的な諸現象を社会福祉的な視点において把握する社会諸科学の一種として成立するものであり、(一)佛教に現われている諸現象のなかに人間の福祉がどのようにとらえられ解決されているかを歴史的社会的にとらえようとする学問であり、(二)佛教の福祉的諸現象が社会体制とどのような関連性をもって成立し発展したか、(三)他の社会福祉活動とどのような関連性において社会福祉の発展に寄与するのであるか、などが主要な研究課題である、という(森永松信「佛教社会福祉学」二三〇頁)。今後の佛教社会福祉のありかたを考え、それを学問的に体系化しようとするならば、右の提言はなるほど尤もであり、異議をはさむ必要もなからう。しかし、このようなことだけでよいとするならば、学問としてはいわゆる現象学的方法論の一面にのみ立脚するものであって、いわば規範的な側面を忘却しているといわざるを得ない。福祉的諸現象が如何なる形においてこの社会に適用されているか、それと同様

なことがらが佛教的諸現象の中にどのように顕わされてきているか、ということは研究の第一条件として基礎的な必須の課題であるが、さらに一步おしすすめて、佛教的諸現象の中に福祉的諸現象を見出し得る根拠は何か、何故に両者が結合し得るのであるか、を究明し、さらに如何にあらねばならないかを解決しなければならぬ。かくしてこそ、はじめて現象論の上に立つ、規範論としての佛教福祉論が提示され得るのである。そのためには、社会科学としての社会学的方法論(現象論的方法論)を用いると共に、人文科学としての佛教学的方法論(規範論的方法論)を適用しなくてはならないとおもうのである。われわれは、ここで学問のありかたに対して一つの大きな反省をもたらすことができるようである。佛教福祉論をとりあげることによって、やや行詰まり状態になりつつあるところの佛教学のありかたを打開すると共に、一方、近年飛躍的に学問的領域に自己の位置づけを試みている社会福祉学を根拠づけることができるのではなからうか。

すなわち、佛教学の面からいうならば、哲学あるいは

宗教学という人文科学の一分野として、主として佛教学の研究を中心としており、規範学的なありかたを伝統的学風としている。もちろん、社会科学の急速な進歩に刺戟されて、佛教学においても多くの社会科学的方法論が用いられ、伝統的な佛教学とは異なった新しい分野、たとえば社会思想の一つとしての佛教思想の解明、

あるいは佛教教団の社会的機能、心理学的方法による宗教意識の調査研究、風俗、習慣としての佛教行事の民俗学的研究、等々その研究成果はまことにすばらしいものがある。しかし、それにしてもなおかつ、佛教学者の研究意識からするならば、やはり佛教精神の探究、佛教思想の形而上学的理論の体系化ということが佛教学本来の使命として、それをもって正統とみなし、他の方法論はいわば応用佛教学とでも名づけてサイドワークにすぎないとしている。広く諸科学からの解明によつてこそ眞の佛教学が確立されることは自明の理であることを認めながらも、なおかつそれらの学問的方法は補助的なものにもすぎないとするところに、いままでの佛教学の偏見があるのではなからうか。規範学的方法のみが正統であると

いう見解はもはや通用しないことはいうまでもないが、ではどうしたらよいか、具体的にいかなる方法論をもって佛教学のあり方を決めてゆくべきかということは今後の課題として残されている。

ヨーロッパとくにドイツの観念論哲学によつて近代の学問の礎石が築かれたことによつて、かつて哲学はあらゆる学問の基礎たることを誇り、形而上学が学問特に人文科学の基礎におかれていた。しかし、いまやかつて哲学者が扱かつていた多くの問題は心理学者や社会学者に委ねられるにいたっている。すべての学問は、本来、人間生活の必要から生れたものである。すなわち、学問といえども人間の文化的所産以外の何ものでもあり得ない。それにもかかわらず、学問は社会生活と直接のかかわりあいがある。たしかに、ヨーロッパの大学は、實際の必要を離れたことを研究し教育する場所であった。その流れを汲む明治以後の日本における学問のありかたも実用ということを無視し、実用的学問は学問の低俗化、俗流化であると非難されていた。しかし、それは實際でないこと、直接実用に関わりないことが、結

局は生活の用になるのであり、社会のためになると考えられたからにほかならない。人間生活の必要ということネグレクトしては学問は決して成立しない。佛教学を例にとるならば、「空とは何ぞや」「識とは何ぞや」という学問は、学者のための学問であり、たんに助教授、教授というように、アカデミックキャリアのためにのみつみあげられるものであつて、社会の必要性とは、およそ縁遠いきらいがないでもなかった。何故ならば、實際生活においては、佛敎が葬式佛敎という一語によつて代表されている現状をみれば、学問の世界とのギャップがあまりにも大きいことに氣付くであらう。このことは、さきの実践宗學と社会福祉のところで述べたとおりである。現代佛敎學の苦惱をそこにありありと見受けることができる。佛敎の社会的実践といった場合、佛敎の敎義を詰め伝えてゆくこと、すなわち伝道、敎化による佛敎思想の普及、佛敎信者の増大のみが考えられているようでは、すでに前近代のと云わざるを得ない。もちろん、佛敎の使命がより多くの信者を育成することにあることはいうまでもない。しかし、佛敎的理念からもち

されるところの社会創造の意欲的な実践が具体的に指示されてこそ、はじめて社会的実践と言ひ得るのである。さきにも考察したように、実践佛敎學という言葉が、とくに佛敎敎化の方法のみを意味するのであれば、限られた一部の社会にのみしか通用しないであらう。現代社会、現代人間生活と佛敎との関わりをどこに求めるか、これはたしかにいまの佛敎學の大きな課題である。この課題に應えるものが佛敎福祉論であり、佛敎社会福祉學である。

さて、さきにキリスト敎社会福祉のところで述べたように、佛敎は厭世主義、出家主義であつて現世否定の傾向が強いという批判に対して、答えるためにはその社会的実践の意味について明かさなくてはならないであらう。たんなる現世否定ではなくして、否定の上に立つてこそ、さらに一転して積極的な実践理論が与えられることを明きらかにすべきである。たとえば、無我の思想が縁起思想であり空思想である、ということだけではなく、その無我の実踐行を宗教的実践として明かすと共に、それがそのまま社会的実践行であることを理論化しなくて

はならない。それは佛教を社会科学的に説明するという
ことではない。佛教のもつすぐれた思想を歴史社会へ対
決せしめ、そしてそれを生成するという動的な面におい
て把握することである。すなわち、佛教みずからにおい
て生み出されてゆく社会的実践の理論である。わたくし
のいう佛教福祉論あるいは佛教社会福祉学とはこのよう
な立場からの理論化をめざしているのである。佛教がみ
ずからの姿を社会へ具体的に現わし出したものがすべて
佛教社会福祉なのである。したがって、佛教社会福祉学
は規範学的方法論に基盤をおきつつ、しかも形而上学的
な觀念論に終始することなく、具体的な社会的諸条件に
立脚する現象論をも包含するものでなければならない。
それがとりもおさず、人間の社会的実践の理論的体系
化という新たな佛教教学の方向を打ち出すことになるので
ある。

つぎに、社会福祉学の面からも反省を加えることがで
きる。社会的諸現象からの帰納によって諸事象の根底を
求めるという現象論的ありかたにおいて、はたしてその
理念が確立されるであらうか。このことは社会科学を通
じての一つの欠点であるとも云えるが、とくに社会福祉

学はそのことを特徴的に露呈しているのではなからう
か。社会事業から社会福祉へと、その呼びかたが変つて
きたことは、たんに名目上の相違にとどまるものではな
く、問題意識のありかた、理論的発想の基盤というよう
な学問的方法論においても相違があり発展がなければな
らない。しかしそれにしても、現実の社会現象に対する
技術的実践に課題の中心があることに変わりはないよう
である。個人と社会との関係をどのようにみてゆくか、福
祉の究極的な姿を具体的にどう描くか、その理念的根拠
をどこに求めるか、などについての学的背景は未だ浅い
といわねばならない。社会福祉学の領域が拡大されるに
したがって、かえつてその根拠が浅薄になりつつあるの
ではなからうか。ともかく、社会福祉学をたんなる技術
論に終らすことなく、規範学にもとづく学として成立せ
しめる基盤を佛教教学から与えることを期待して佛教福祉
論を展開せしめなくてはならない。

したがって、わたくしの意図する佛教社会福祉学は、
社会科学の一科として成立するというような佛教福祉論
ではなく、佛教プロパーからの必然的な展開としての社
会福祉を説明しようとするものである。佛教が人間社会

へ展開するには社会福祉という形でなければならぬ、それ以外の展開のしかたは考えられない、という考えかたである。つまり、佛教理念が人間に受けとめられ実現されたものをすべて社会福祉という、という立場である。さきに述べたように、ここでいう佛教福祉とは佛教と社会福祉とのたんなる結合をはかるだけのものではない。それをかの六合釈というならば、「佛教と福祉」というような相違釈がいままでの佛教学や社会福祉学の立場であり、「佛教の福祉」、「福祉の佛教」という依主釈が社会科学としての佛教社会福祉学という立場であり、「佛教即福祉」という持業釈がわたくしのめざす佛教福祉論なのである。

三

右の論考を発表してから、日本佛教社会福祉学会が組織されて、年々盛んになっていることは同慶にたえない。その年報に、佛教社会福祉論の成立基盤や基本的原理やその本質についてのすぐれた論考がつきつぎに発表されており、また孝橋博士はその名著「社会科学と現代佛教」において、佛教の社会化をめざして佛教社会事業

の理論と批判をおこない、佛教原理が社会福祉理論へいかにかわるべきかを明快に説き示めされている。さらにまた上田千秋教授は「佛教社会事業論の学問的性質」（日本佛教学会年報第三十五号）を論じて、佛教学者の社会事業論に対して鋭い批判を加えている。拙論に対しても「科学以前の認識」という評言をいただいているが、それらのことに対していまここで詳しく意見を開陳する紙数の余裕のないが残念である。ただ一言いえることは、佛教社会福祉論は社会科学の面でのみ論すべきではなく、人間存在の根源を凝視する透徹した哲学をも必要とする、ということである。社会福祉論が社会科学の理論の間尺からはみ出てはいけないというのであれば、社会科学の間尺に関係の少い「佛教」を冠した佛教社会福祉論はその用語自体に多様な理解を生ずるおそれがあり、ひいてはその人の立場によって混乱を生ずるにいたるであらう。やはりわたくしは、佛教といういわば一つの哲学からの必然的展開としての社会福祉（社会化）を考えることを筋道としたい、と思う。それが科学以前であれ哲学以後であれ。ヒューマニズムの真価發揮の段階で両者は統一結合されるであらうから。（佛教大学教授・佛教学）